

草津市立矢倉小学校通信 平成31年1月16日 NO.16



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

人から言われ、正しく気づく

「あの子は、いつもあいさつしてくれる。気持ちのいい、感じのいい子やなあ。」

小学生の頃の話である。私の家の前は通学路となっており、たくさんの方が行き来した。その中にいた同級生の女の子を評して発した母の言葉である。とたんに私は、自分は「できていない、どうしよう。」と困惑し、比べられ、とがめられるのではないかとびくびくし、情けなくもなった。実際、母はそれ以上のことを言ったのかどうか、今となっては定かでないが、気まずい思いをしたのだけは覚えている。ひょっとすると、母は私と比較してどうこうということではなく、単に「気持ちのよいあいさつをいつもしている子」ということだけで感心したのだったかもしれない。娘がいてくれたらとぼやく母親にとって、がさついた自分たち兄弟の雰囲気、華やいかわいらしさがほしかったというのものもあるだろう。もちろん、その時の私は、とっさにいいわけを思いついていた。自分を守る本能のようなものだ。「だって、学校へ行くといっても、我が家の隣が学校だから、近すぎで誰にも会わないし、あいさつもできない。」と。問題は学校までの距離が長いかどうか、街の人に出会うことが多いかどうかではないのだが…。

以来、自分はいさつもしないで悪い子だと思われているのではないかと気にするようになった。

中学生になって、友人の家に遊びに行くことがあった。中学生ともなると、たいてい学校の帰りに行きつけの広場で遊ぶことが多かったのだが、めずらしくその友人の家に上がり込むことになったのである。夕飯前だったこともあり、「こんな時間にすみません。」と断りを告げて上がり、しばらく友人の部屋で談笑して、これ以上遅くなるとはよくないと「どうもお邪魔しました。」と言って出ようとしたときのこと、その友人の母親からしっかりとあいさつができて立派だと感心された。私としては、申し訳ないという思いから出た一言であり、迷惑だったのではないかと気になっただけのことなのだが…。

私の家では人様に迷惑をかけるものではない、相手にわが心を照らして自分はどうするとよいかを考えて動くようにと言われてきた。夕方、よその家に行くことと言えば、「こんな時間に遊びに行くものではない。相手様の家に迷惑をかける。夕方によそに行かせる親としても、迷惑をかけているに違いないと心配だ。第一、こちらも忙しく夕飯の支度をしているのだから…。」と、常日頃からこんな話を聞かされていたのである。私としては、にもかかわらず友人宅を訪問したのだから、それなりのあいさつをしなければいけないと、とっさに思いつき、発したあいさつである。友人の母親の一言で、それなりによさそうな受け止め方、ふるまい方ができるようになったと気づき、少しだけ大人になれたように感じた出来事になった。

人は、あるべき姿、正しさといったことについて、言葉ではわかっているものだ。そうして、場を変え、立場を変えて、「こんなときは、さあどうする。」と言わんばかりの場面に出くわし、成長していくと言っていいだろう。とっさの言動を決める基軸のようなものを日頃から気かけられるようにしておきたい。

校長 大林 道範